教育実習を終えて

日本語日本文学科　４回生
村田　葵

私は今でも教育実習中の日々を思い出しては笑顔になり、生徒たちにもう会えないことに寂しさを感じるほど充実した教育実習だった。

実習は11月に行った。３週間という短い期間だったが、教師という仕事は常に忙しくて大変であった。しかし、それ以上に子どもたちの成長を近くで見ることができて、とてもやりがいを感じた。

授業は３クラス担当させていただいた。クラスによって雰囲気や能力が大きく異なっていることを知り、クラスに合わせた対応や状況に適した質問や説明をすることの大切さを学んだ。授業を初めてさせていただいたときは、緊張で生徒の反応を見る余裕がなかった。しかし、余裕が生まれてくると生徒の様子を見ながら授業ができるようになった。すると同じ説明や質問でも、クラスによって反応や理解度が違うことに気がついた。そこでクラスの様子を観察して、それぞれのクラスに合った説明になるよう工夫をした。それにより、「わかった」「面白い」という反応をしてくれる生徒が増えた。そのような反応を見れたことや、授業を楽しそうに聞いてくれる様子が見られるたびに、大変だった教材研究や授業準備を頑張ってよかったと思った。この学びは、実際に生徒の前で授業をしないと気づくことができないものであった。

また担当教諭から、子どもたちとの接し方を学んだ。担当教諭は生徒を第一に考えていた。特に「子どもを救う」という言葉を何度もおっしゃっていたことが印象に残っている。また、勇気を出して発表したが間違えてしまった生徒や答えが分からない生徒に対して、安心感を与える声かけをしている姿を見た。他にも授業を作るときや反省会のとき、生徒たちへの対応を熱心に指導していただいた。日々の生活の中だけでなく、授業の中でも生徒を第一に考えられるような余裕を持つことの大切さを学ぶことができた。

以上のことから、教育実習を通して生徒のことを第一に考えることの大切さを学んだ。特に学校は生徒のためにあり、教師は生徒にとって居心地の良い環境を作る立場だと何度も感じた３週間だった。そのために、生徒の実態をよく知り、日々試行錯誤しながら適切な対応をする姿勢が欠かせないと思った。また実際に教師の仕事を体験して、忙しい中でも生徒の悩みに寄り添ったり、笑顔で接してくださった先生方の凄さを実感した。この経験と学びは、実際に現場に行かないと知ることができないことばかりであった。この経験を忘れず、来年からからの教師生活に活かしていきたい。

こんなにも楽しく充実した３週間を過ごすことができたのは担当教諭をはじめ、先生方が過ごしやすい環境を作ってくださったためである。先生方に感謝の気持ちを忘れることなく、私自身が教育実習の担当になった際には先生方のようなサポートをしていきたい。

教育実習を終えて

英語英米文学科　４回生
半田　愛華

教育実習が始まる前はどんな実習期間になるのだろうと楽しみにしていると同時に不安があったが、現場に入って教職員の皆さんの熱心な力に支えられて無事に終えられたことをすごく嬉しく思う。

最も実感したことは、授業の準備量と授業時の教員の立ち方である。授業が始まる前に何度も指導教員に指導案の添削や授業アドバイスをいただき内容が頭に入るまで何度も練習した。授業が終わる度に反省会を行い、次の授業へと繋げていく。反省会がものすごく重要だということを知った。指導教員に「生徒にとって50分間はとても価値のある時間にしないといけない。なぜならその50分間が生徒にとって一生の学びになるからだ」と教わった。授業準備や反省会でほんの一部かもしれないが50分間の重みを知ることができた。準備が出来ていないから無理ではなく、今できるところまでやろうという気持ちになった。授業を行う際に気をつけていたのが教員の立ち位置である。講話の時に、生活指導の先生から真正面から教えることだけが全てではないとお話を聞いた。時には生徒と同じ目線になり横から教えることも大事だと言われた。それからどうすれば生徒と同じ目線になり、上手く教えられるかを意識しながら行った。最終授業ではアンケートを行った。この活動に興味を持ったという声やこのような活動がしたかったという生徒の生の声が聞くことができ今後の参考になった。

今振り返れば、授業を行うことはとても難しいし、たくさんのエネルギーを消費する。同じ科目の先生のアドバイスはものすごく大切だが、時には他教科の先生方からのアドバイスも大事だった。このような授業を行うと教科横断的指導になるのではないかと一緒に研究してくださったりして、より良い授業を行うことができた。実習期間中は本当に右も左も分からない状態だったが実習校先の皆さんにあたたかく迎えていただき、プロフェッショナルと言える先生方がたくさんいる現場の中で過ごさせていただけたことは本当に幸せだった。

この実習では自分の未熟さを知り涙する日もあった。自分が好きな教科なのに教材研究をすればするほど嫌いになったり、泣くほど控室から出たくなかったり、先生という職業の魅力が分からなくなったこともあった。でも乗り越えることができたのは、同じ夢を持ち共に励まし合えた仲間がいたからだ。模擬授業や授業準備を手伝ってくれたり、何気ない会話で笑いあえたりと一人ではないと感じることができたからだ。また自分に至らない点がいっぱいある中、丁寧にあたたかいご指導をしてくださった指導教員やいろんな先生方、授業に一生懸命励んでくれた生徒たちがいてくれたからだ。この経験は今後の自分にとってかけがえのない大切な一ページになった。

この教育実習に関わってくださった全ての方に感謝の気持ちでいっぱいである。

教育実習を終えて

国際教養学科　４回生
持光　香奈

「自分に勝確」。これは、私の担当させていただいたクラスのスローガンである。「勝確」とは、今の自分を超えること、成長すること。3週間の教育実習では、この言葉を胸に2つの観点から「勝確」を目指した。そしてその過程が私自身の成長にもつながったと感じている。

1つ目は「気づく力」。私はまず生徒の名前を覚え、毎日クラス全員に話しかけることを心がけた。また、部活動の見学や校門での挨拶など、少しでも生徒と関わる場面が増えるように努力をした。その結果、生徒から話しかけられる回数が徐々に増え、授業に前向きに取り組む姿か見られるようになり、信頼関係が築かれていったように感じる。特に印象的だったのは、生徒との連絡ノートで、控えめだった感情表現がだんだんと豊かになったことである。この経験を通して、生徒の多様さを再確認するとともに、個々にあった対応の仕方の重要性を学んだ。この気づきこそが、私にとっての「勝確」だと感じている。

2つ目は、「対応力」。私は、臨機応変に対応することが苦手で、実習中にも想定外のことが起こると戸惑い、自分に腹を立てる場面があった。例えば、授業中には場の雰囲気に流され展開が上手くいかないことがあり悔しい思いをした。指導教諭には「ただ楽しいだけでなくメリハリのある授業が大切であること、机間指導は目的をもって行うこと」とアドバイスをいただいた。この言葉のおかげで、質問を投げかけた後の「間」の大切さに気付かされた。それまでは、「間」を失敗と捉え、自分から答えを提示していた。しかし、その後は「間」を楽しみ有効活用することで、生徒がどう感じ、考えているのかを観察し、授業の質を高めることができた。これもまた、私にとっての「勝確」であるといえるだろう。

私は母校ではない中学校で実習を行ったため、受け入れてもらえるか不安だった。しかし、生徒をはじめ、他の教育実習生、先生方があたたかく迎えてくださったおかげで充実した学びの深いものになったと感じる。思い返せば、つらいときやうまくいかないときは、生徒の笑顔や「先生の授業楽しみ！」といった言葉に支えられた。特に生徒の元気で明るい挨拶は、毎日エネルギーを与えてくれ、活力的な日々を過ごすことができた。こうした経験を通じて、教師とは常に「生徒のために」という向上心を持ち続ける存在であるべきだと感じた。

実際に教育現場を経験し、中途半端な気持ちでは教師になれないこと、なってはいけないことに改めて気づかされた。しかし、やはり私は今日になりたい、そう感じた。このかけがえのない貴重な3週間を無駄にせず、「先生」ともう一度呼んでもらえる日が来るまで、「自分に勝確」を掲げ、努力を重ねていきたい。

教育実習を終えて

史学科　４回生
藤澤　麗未

私は、母校である神戸市立の中学校で令和6年5月27日から6月14日までの3週間教育実習を行った。この3週間は長いようで短く、たくさんの学びがあった。

教育実習校で3回生から部活動指導員として週に2回ほど行っていたが、教育実習生として事前訪問で中学校の門を通った時はいつもと違った感情で、とても緊張したことを覚えている。教科指導の先生から、2年生の社会科（歴史的分野）を2クラス分5単元と、道徳1クラス分1時間、計11時間の授業の担当箇所を教えていただき、実習日まで教材研究を中心に行った。

1週目は、警報が出たり2年生の野外活動が重なったりした関係で、生徒との関わりを持てる時間が少なかった。そのため生徒が登校する時間に合わせ、教室で関わりを持とうと頑張ったが、あまり距離を縮めることができないまま1週目が終わってしまった。唯一救いだったのは、指導員として関わりのある生徒たちがクラスにいて、その生徒と仲の良い子が話かけてくれて、話しの輪に入れるようになった。もう少し自分からコミュニケーションをとるべきだったと感じている。

2、3週目は実際に授業を行った。生徒の前に立つことは不安の方が大きく、声が小さくなり授業の主導権を握れないまま1時間終わることが多かった。その中でも私が1番苦戦したことは発問で、特に生徒が答えた意見をさらに深堀するような問いかけができなかった。また生徒の反応を見る余裕を持てなかった。しかし「生徒を信じて授業を生徒に任せなさい。授業中の顔がこわばっている。」「教師が授業を楽しみながらすること。」と先生方のフィードバックから、不安と緊張でいっぱいになっていた気持ちが少し楽になり、生徒はプリントを埋めながら話しを聞くばかりで、考え学ぶという生徒主役の授業になっていないことにも気づいた。そこから歴史は暗記科目ではなく過去から現在への繋がりを持たせるとともに、地理的分野との繋がりから地図帳を使い特産物クイズをしたり史料・動画を使ったりしながら生徒の興味関心、疑問を大切にする授業を行った。そして生徒の様子を見ながら授業のペースを合わせられるようになったことで、「先生の今日の授業面白かった。」「特産物クイズまたやってほしい。」などと生徒から言ってもらえるようになり嬉しかった。それが心の支えとなり頑張りきることができた。

教科指導の先生から、「自分が想定したように授業が進まなかったり予想もしていない答えが返ってきたり、それが難しいところでも面白いところでもある。」という言葉をいただいた。その言葉を私は忘れることができない。教育実習を通して、どれだけ教師が生徒第一で向き合い頑張っているのか、教師が頑張ったら生徒もそれに応えようと一生懸命になる姿、生徒が笑顔になる瞬間。私にとって一生忘れることができない貴重な3週間であった。この経験を活かし頑張っていきたいと思う。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
小林　怜那

大学で学ぶことのできないたくさんのものを学ぶことができた1ヶ月の教育実習でした。私にとって人生に残るかけがえのない経験になりました。

私は、小学校６年生のクラスで実習させていただきました。実習開始前は、授業を上手くできるかなど、不安なことが多くありました。しかし、いざ実習が始まってみると毎日がとても充実し、長いと思っていた1ヶ月の実習はあっという間でした。

実習初日の放送朝会で、全校児童に挨拶させていただきました。教室のテレビで全員がみていると思うととても緊張し､教室で初めて子どもたちの前に立ったときもとても緊張しました。そんな私ですが、笑顔で明るい表情でいることを常に心がけていました。嬉しいことに、校長先生、教頭先生、担当指導教員の先生や他の先生方から表情が素敵と褒めていただき、緊張しているのが表情に出てないと言っていただきました。その言葉のおかげで少し緊張が解け、自信をつけて実習をスタートすることができました。

初めての授業では、指導案通りに進めることで頭いっぱいになり、自分本位な授業になってしまい、子どもたちに申し訳ない気持ちと授業の難しさを痛感しました。授業の中に、子どもたちが話し、発表する活動を盛り込んでも、私が考える「自ら考えて学ぶ授業」にはなりませんでした。そのことを担当指導教員の先生に相談すると､「子どもたちが意見を話す場は多くすること、発表などの意見も大切だけれど、子どものちょっとした一言も重要になる」と教えていただきました。そのご指導をいただいてからは、私はもっと子どもの発言に耳を傾け、大事な一言を逃さないことを心掛け、子ども主体の授業に近づけるように意識しました。毎時間、様々な課題があり、反省の多い授業にも関わらず、子どもたちは毎授業ごとに「楽しかった」「分かりやすかった」などの感想を言いにきてくれて、毎回の励みになりました。

不甲斐ないところが多く未熟な私を、先生方は温かく受け入れてくださいました。子どもたちも私を温かく迎え入れてくれました。みんなと一緒にすごした1ヶ月は何よりの宝です。授業の進め方や子どもへの接し方など、たくさんのことを学ばせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。改めて、私は、この実習で尊敬すべき先生方に熱心にご指導いただき、良い経験ができたと実感しています。

実習を通して、子どもの成長を見守ることができ、子どもと共に学び成長できる教師という職業にとても魅力を感じました。大変でもそれを超えるやりがいがある仕事であるということを実感しました。この貴重な経験を生かし、子どもたちにとってよい学び、成長に繋げることができる教師になるために努力したいと強く思います。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
小野田　望

長いようで短かった１ヵ月の教育実習は、さまざまなことを学ぶことができ貴重な経験をさせていただきました。そして、一生忘れない１ヵ月となりました。

実習初日は緊張と不安な気持ちを抱えたまま、実習校へ向かいました。しかし、そんな気持ちを忘れるくらい、多くの児童が話しかけてくれました。指導担当の先生が「休み時間は子どもたちと遊んでおいた方がいい」と言ってくださり、２０分休みや昼休みは運動場に出て、多くの児童と鬼ごっこなどをしました。毎日一緒に遊んでいると教室内でも話しかけてくれる児童が増えて、遊ぶことを通して児童たちと関係を築くことができることを学びました。

授業は１週目の金曜日からさせてもらいました。初めて児童の前でさせてもらった授業は、どのような雰囲気になるのかわからず緊張していました。早口になったり児童の発表に対して同じような言葉しか言えなかったりして、わかりにくい授業だったなと思いました。しかし、授業が終わったあと「先生の授業、面白かった！」と多くの児童が言ってくれてうれしかったです。どの授業も印象に残っていますが、特に印象に残っているのは研究授業です。本番の前に学年の先生方が児童役となって見てくださって、そこでもらったアドバイスをできる限り実践しようと思い、研究授業をしました。もう少しこうすればよかったと思ったところはありましたが、指導担当の先生が「今までで、一番いい授業でした」と言ってくださって、一番やり切ったと思える授業になりました。

今回実習中に誕生日を迎えることになり、最初は不安でした。しかし、４年生からメッセージカード、担当させてもらった３年生から「ハッピーバースデー小野田先生」と書かれたカードを掲げてお祝いしてくれ、２回サプライズを用意してくれていました。他にもたくさんのお手紙をもらったり、児童や先生方が「お誕生日おめでとう！」と声をかけてくれたりして、一生の思い出に残る誕生日になりました。そして、最終日にもサプライズを用意してくれていました。児童からのお手紙と写真をまとめてくださったアルバムをもらいました。最後挨拶をさせてもらうとき涙が止まらず、児童たちもたくさん泣いてくれました。そして、児童が私の姿が見えなくなるまで「ありがとう！」や「またね！」と言い続けてくれ、とてもうれしかったです。

指導担当の先生をはじめ実習校の先生方は私のことをよく気にかけてくださり、１ヵ月の実習を終えることができたと思っています。「教師の仕事は子供や保護者、地域の方、同僚、他にも様々な人との関わりが大切になってくる仕事」と教えてくださり、実習を通して様々な人と関わることの大切さや楽しさを学ぶことができました。「一緒に働けることを楽しみに待っています」と言ってくださっているので、実現できるようにこれから頑張っていきたいです。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
可藤　菜月

４週間による母校での小学校実習。児童と仲良くなれるだろうか、授業を分かりやすく進められるだろうか、様々な不安を抱えながら緊張の初日を迎えました。しかし、小学校に足を踏み入れると、その不安や緊張は一瞬で消えました。なぜなら、児童や先生方が温かく迎えてくださったからです。そんな貴重な４週間で、私は教師という職業の素晴らしさや楽しさ、そして大変さを学ぶことができました。

特に強く印象に残ったことが大きく分けて２つあります。

まずは、児童のことを理解する大切さです。先生方は、常に児童一人ひとりを大切に考えられていました。学校全体で児童のことを共有し、支え合う姿勢が印象的でした。その結果、先生と児童の距離が近く、担任を超えて他学年の児童にも深い理解をされていました。廊下で会ったり登下校時に声をかけたりと、日常的に児童と真摯に向き合い、その時間を大切にされていることが伝わってきました。この積み重ねが、児童一人ひとりに寄り添い、児童が安心できる居場所を作り出すことができているのだと実感できました。

次に、教師の責任の重さです。児童は教師の姿や表情をよく観察しており、その影響は大きいものだと実感しました。児童にとって、教師は近い存在の大人であり、６年間という人格形成における重要な時期を直接支える存在です。このことから、教師ということを常に意識し言動するよう過ごしました。その内に、教師が担う役割の大きさを学ぶことができたと感じます。そして、先生方は全ての児童が安心して学び学校生活を送ることができる環境を整え、個々のニーズに合わせた適切な支援をされていました。教師の関わり方次第で、児童の成長や学校生活が大きく変わる可能性があると思います。そのため、日々の行動には深い責任が伴う職業であると強く感じました。

そして、この４週間で教師の仕事の素晴らしさを感じ、改めて教師になりたい思いが強くなった瞬間が多くありました。その中で、教師は授業を行うことだけに留まらず授業準備や学校業務に加えて、保護者との連絡、トラブル対応、学校行事、さらには宿題等のフィードバックもあり、大変な職業だと感じた部分もありました。しかし、ある日教師が感じるやりがいはその大変さを上回ると、先生が教えてくださりました。それを短い期間ですが感じることができた瞬間がありました。それは、運動会練習においてです。練習を重ねていく度に、普段の学校生活においても児童たちの成長を間近で感じることができました。運動会練習初日から本番にかけて、児童たちの進歩を見守る中で、教師のサポートがどれほど重要かを実感しました。教師という職業は大変だと思いますが、児童の成長を目の当たりにしたときの喜びは、それ以上の価値があると感じました。

私は以前から教師になりたいという思いをもっていましたが、母校の小学校で実習を経験し、その思いはさらに深まりました。素晴らしい先生方や児童たちと出会い、絶対に教師として恩返しをしたいと思うことができました。そう思えたのは、先生方がご多忙の中でもご丁寧にご指導してくださったお陰です。４週間で得た経験は、私とってかけがえのない宝物となりました。この経験を糧に、今後の成長に繋げていきます。実習を受け入れてくださった先生方、温かく迎えてくれた児童たち、本当にありがとうございました。

教育実習を終えて

教育学科　３回生
髙木　菜帆

小学校での教育実習を振り返ると、教師という職業の楽しさややりがいを感じると同時に、大変さや指導の難しさも学ぶことができた４週間だったと思います。

実習が始まる前､私は楽しみな気持ちよりも不安な気持ちの方が大きかったように感じます。先生方や児童と良い関係を築くことができるのか、１人で前に立ち、自信を持って授業をすることができるのかなど様々な不安が私を襲い、特に実習が始まる前日はあまり寝ることができませんでした。

実習初日、不安な気持ちを抱えたまま初めて担当クラスの教室に入った時、児童や指導員の先生がとても暖かい笑顔で迎えてくださり、安心したことを今でも覚えています。私はこの実習で「児童と積極的に関わる」ということを目標にしていました。私は自分から誰かに話しかけることが苦手で、そんな自分を少しでも変えたいという思いがあったので、初日から勇気を出して児童に話しかけました。すると、徐々に児童も心を開いてくれたので、すぐに仲良くなることができました。この日以降も休み時間や給食の時間などに児童と話したり、遊んだりする中で少しずつ信頼関係を築くことができたと思います。１週目に、初めて授業をさせていただきました。とても緊張しましたが、４５分間の授業を終えることができてほっとしました。その一方で、板書の量や速さ、発問の仕方、時間構成などに多くの課題があると感じました。その日の放課後、児童のノートに書かれた振り返りを見ると､「楽しかった。」「分かりやすかった。」と書かれており、うれしい気持ちと同時に、もっと頑張ろうという意欲に繋がりました。２週目は、実習期間で最も苦しいと感じた１週間でした。授業をする機会も多くなる中で自分の不甲斐なさを感じ、児童の前に立つのが怖いと思う時もありました。そんな私を救ってくれたのは実習校の先生方でした。放課後に先生方とお話しをする中で、失敗を恐れずに新しいことに挑戦していくことの大切さを学び、再び前を向き、努力していこうという気持ちになりました。３週目からは、他学年の授業を見せていただく機会が多くなりました。先生によって発問の仕方や板書構成、ＩＣＴの活用の仕方などが異なっており、とても学びの多い１週間となりました。４週目には、実習の集大成となる道徳の授業をしました。初めて挑戦することも多く、不安の中で迎えた授業でしたが、これまで先生方が私にかけてくださった言葉や何事にも前向きに楽しんで取り組む児童の姿が私の支えとなり､最後の授業を終えることができました。

４週間の実習は決して楽なものではありませんでした。それでも乗り越えることができたのは､実習校の先生方や児童が毎日私に多くの学びと感動を与えてくださったからだと思います。実習期間中に私を支えてくださったすべての方への感謝の気持ちを忘れずに、これからも努力し続け、立派な小学校教諭になりたいと思います。

教育実習を終えて

教育学科　４回生
北村　葵

このたび2週間、姫路市の中学校へ教育実習に行かせていただきました。2週間という短い期間でしたが、毎日がとても充実しており、気がつけば最終日で、とても濃い日々でした。

初日は、中学生ということもあり、上手く生徒たちと関わっていけるのかなと不安な気持ちがありました。私は、今回実習が始まる前に「自分から声をかけていこう。」と心に決めていました。ですので、初日から自ら声をかけていき、給食やそうじの行い方を生走たちに教えてもらいました。担当のクラスは1年1組でしたが、本当に素直な子が多く、実習校が実施している「かたらひノート」では、今日の反省をこれからどう改善していくかしっかり自分の中でフィードバックを行っていることが書かれていて、日々成長して行っているなぁと間近で感じました。キャリア教育のアンケートを書く時があり、その時に一人一人の回答を見させて頂きました。一人一人、どんな人になりたいのか、どんな職業につきたいのか書かれていて、その夢が本当に素敵だなと思い、心の底から応援したくなりました。その気持ち一杯で、最終日には１年1組のみなさんに、夢を持つことの大切さについてお話しました。「全力で走り続けたら絶対に夢に追いつくから、諦めずに頑張って欲しい。」と伝えました。そして自分自身も頑張ろうと刺激を受けました。また、今回の実習で多くのことを学びました。その中で2つのことを書きます。まず1つ目は、英語の授業についてです。分かりやすい授業をするために、細かい所まで工夫することの大切さを学びました。例えば導入では今日学ぶポイントの日本語の意味をイメージさせるために、既習の範囲で発問して行くことです。発問の時の自分の立ち位置も、that は遠くのものを指しているので大型テレビから遠く離れるようにしました。授業していく中で、先生自身が明るく楽しく行っていかないと生徒たちも一緒に楽しく学べないということにも気付きました。2つ目は道徳です。道徳の授業を行うにあたって、自分は生徒たちに何を伝えたいのかを軸に持つことか大切だと学びました。指導書の通りに行うのではなく、授業の中でどのように生徒にアプローチをしていくかをしっかり考えていくことで、より深まる授業になります。主発問の考えをより深めるためには、どのような発問を重ねていくべきか何度も考え、そのおかげで自分にとって納得の行く授業が出来たと思います。英語、道徳どちらでも、生徒に対して先生方は本当に真正面から向き合って、生徒第一に考えて授業を構成なさってたので、その熱量に改めてすごさを感じました。

今回の実習を通して、生徒たちの成長を誰よりも願っている先生方を見て、私自身も改めて先生になりたいと思いました。また、他の7人の実習生と切磋琢磨し合えて、しんどいこともあったけどその時仲間たちに支えてもらいながら乗り越えることができました。本当に一生忘れない貴重な経験ができた2週間で、とても価値のある教育実習でした。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科　４回生
荒川　彩花

私にとって約７か月間の幼稚園実習は、たくさん苦戦し、その分多くの学びを得ることができた期間となった。これまでの保育実習や施設実習とは異なり、今回は附属幼稚園において、３．４人の実習生が１つのチームとなり、各クラスに入って通年で実習を行う。この形式の幼稚園実習を通して、以下の２つが私にとって特に大きな気づきと学びに繋がった。

まず1つ目に通年で実習を行ったことで、運動会練習から運動会本番までの子どもの成長を観察できた経験が大きな学びとなった。５歳児の種目は、竹馬・竹太鼓・リレーと多種目控えていた。毎日の運動会練習では、運動会に向けて「ねらい」を明確にした活動が行われていた。例えば、リレー練習１つにしても、早く走れるように練習する日・上手にバトンパスできるように練習する日・子ども自身で話し合ってリレーの順番を決める日などがあった。このことから、１つの種目でも最初からいきなり本番と同じような形で練習を始めるのではなく、今日の「ねらい」を明確にして、1つひとつ段階を踏みながら進めていくことが重要であると学んだ。竹馬については、得意な子どももいれば、苦手で1人で乗ることが難しい子どももいて、個人差が大きくあった。しかし保育者は「運動会本番、全員が竹馬に１人で乗っている姿を保護者に見てほしい」という強い思いから、登園後・運動会練習・給食後・降園前など、子どもが「竹馬したい！」と思えば、いつでも練習できるような環境を整えていた。そして、1人ひとりのサポートに回り、熱心に指導していた。このことから、目標達成に向け、限られた時間の中で、子ども全員がスキルアップしていくために、どのように活動を進めていくのか、時間の使い方と計画性の重要さを学んだ。そして、運動会当日の子どもの姿を見て、私の頭の中に、1人ひとりがこれまで練習してきた場面が思い浮かび、自然と涙で目が潤んだ。

２つ目に３～４人のチームで実習を行う体制だったことで、協力して進めることの難しさを実感した。全日保育では、チームでクラスの１日の活動を分担し、それぞれが担当の時間帯で、責任もって保育を行う。そのため、全日保育日までの限られた日数の中で、指導計画を立てるために、チーム全員で集まり意見を出し合う・まとめる・深めるという時間が必要となった。一見簡単そうに見えるが、実際は全員が協力体制でないと進まず、どれだけ難しいかを痛感した。しかし現場に出ると、常に園全員で話し合うこと、他の職員と連携を取りながら保育を進めることが求められる。そのため、今回の実習で気づくことができたことは大きな成長でもあり、保育者全員で子どもの成長を見守りながら、サポートしていきたいと強く思うきっかけとなった。

４月から現場に出て働き始め、保育の進め方に悩むことが出てきた場合は、幼稚園実習での学びや記録を振り返り、アイデアを得たいと思う。

幼稚園教育実習を終えて

教育学科　４回生
田中　友梨

新しい経験をし、知らなかった大事なことを学べたと思える2週間の幼稚園実習でした。母園で経験させていただきましたが、実習に行くまでは楽しみな気持ちの反面、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、始まってみれば２週間はあっという間に過ぎてしまうほど、子どもたちとの実習生活は素晴らしいものとなりました。そんな実習の中で特に学ぶことができたと思えることを紹介します。

１つ目は、諦めないということです。子どもたちは一度の注意だけではなかなか行動することができず、何度も同じこと繰り返してしまうことがあります。しかしそこで諦めるのではなく、子どもたちに何度も伝える、そして子どもたちができたらしっかり褒めることの大切さを先生方から学ぶことができました。特に印象的だったのは運動会のマーチング練習での先生方の姿です。なかなかできない子どもたちに対して、熱心に何度も何度も伝えている姿に応えるように、だんだんと子どもたちもできるようになってきました。その場面を見て先生方の子どもたちを第一に考え､熱心に指導する場面にとても感動を受けたことを覚えています｡そして、できたときの子どもたちの笑顔はとても達成感に満ち溢れていました。その達成感こそが、子どもたちの自信に繋がるのだとその時改めて感じることができました。

２つ目は、子どもと真剣に向き合えば子どもたちもそれにしっかり応えてくれるということです。私の実習園の場合、毎日担当する学年やクラスがバラバラでした。そこで、どうやって子どもと向き合おうか悩むこともありました。最後の研究保育では３０人程度の年長クラスを担当させていただいたのですが、研究保育を行う前は元気溢れる活発な姿の子どもたちを見て楽しみに思った反面、話を聞いてくれるのかなと不安な気持ちの方が勝ってしまいました｡「どうやったら子どもたちと真剣に向き合って保育ができるのか」と考え、実習の２日前からクラスの子どもたちの顔と名前が一致できるよう覚えたり、休み時間ではそのクラスの子どもたちと積極的に遊んだりして、どのようなことが好きなのか、また子どもたちはどのような性格なのかをまず知るということを一番に心がけました。そして、子どもたちと話すときは子どもたちの目をしっかり見て、心を落ち着かせてから話すことも意識しました。そうするうちに子どもたちもだんだんと心を開いてくれるようになり、研究保育が終わると「楽しかった！ありがとう！」と言ってくれて、私自身もやってよかったな、楽しかったと心から思いました。

この２週間は慣れない日誌や指導案に追われることもありましたが、それ以上に大事なことを学ぶことができました。これも園長先生をはじめ、先生方の温かいご指導や毎日成長する子どもたちの姿に支えられたからこそ、経験し学ぶことができました。この感謝の気持ちを忘れずに、４月から小学校教員になっても、この経験を生かして頑張りたいと思います。

教育実習を終えて

家政学科　４回生
古谷　唯有

私は、母校の高等学校で３週間教育実習生としてお世話になりました。この実習を通じて、教師の大変さや楽しさを実感し、自分の成長を強く感じることができました。

教育実習を始めるにあたって、最も大きな不安は「実際に授業がうまくできるかどうか」でした。実際、実習での初めての授業は自信が全く無く、不安な気持ちで行いました。授業を受けてくれた生徒に対して、こんな授業をしてしまって申し訳ないなとも感じていました。授業を行う回数を重ねていくにつれて、生徒との関わる距離感や、授業の流れはつかめていけましたが、「うまくできた」という手ごたえはあまり感じていませんでした。しかし、最後の研究授業では少し達成感を感じることができました。生徒とたくさん対話ができたり、時間に余裕をもって授業を行うことができたりなど、自信をもって授業をすることができました。授業が終わった後に、生徒が書いてくれた授業プリントやGoogleフォームの回答を見ると、私の授業で学んで欲しかったことを多くの生徒が書いてくれていました。授業を通して伝えたかったことがしっかり伝わっていたのだと、この瞬間安心と喜びを感じました。

また、実習を通して観察することの重要性を強く感じました。実習最初の１週間は、ほとんど観察実習を行っていました。指導教員の先生からのアドバイスで、自分の担当の学年や教科の授業だけでなく、他学年や他教科の授業にも積極的に参加していました。そして、観察するときには全体を見るだけでなく、１人だけに注目して見るなどと様々な視点で見ることを意識しました。すると、生徒の反応や授業を行っている先生の言動から、生徒が主体となる授業をつくるためのヒントをたくさん得ることができました。さらに、得たことは自分の授業に活用することができました。

一方で、生徒とのコミュニケーションの取り方に悩むことがありました。実習初日、生徒に何を話しかければ良いのか分からず、あまり関わることができませんでした。このままでは良くないと思い、小さいことでもいいからたくさん話しかけることを意識して関わるようにしました。だんだん生徒一人一人の個性や特徴がわかってきたり、話しかけてくれる生徒が増えたりして、最終的にはクラスのほとんどの生徒と話すことができました。この経験を通じて、教師にはコミュニケーション能力や共感力がとても大切であることを改めて認識しました。

実習を終えた今、私は教師としての自己の課題と向き合うとともに、今後の成長に向けた意欲を新たにしています。教育の現場は日々変化しており、その中で柔軟に対応し続けるためには、常に学び続ける姿勢が重要です。今回の実習を通じて得た経験や反省点を生かし、将来的には生徒一人一人の個性を尊重し、より良い学びの場を提供できる教師を目指していきたいと思います。

教育実習を終えて

管理栄養士養成課程　４回生
中田　恵

教育実習に行くまで、私は不安でいっぱいでした。しかし、３週間の高等学校での教育実習は、達成感とともに「より成長したい」と強く感じられた実りある実習期間でした。

教育実習を通して学んだことは、大きく２つあります。

１つ目は声掛けの仕方です。調理実習の指導では常に机間巡視を行うことで、安全に調理できるようにすることに加え、よりよく学ぶためのサポートをする必要があります。その際に、少しの言葉の選び方や伝え方を工夫することが、生徒の公平な学びを確保することにつながると学びました。手が止まった生徒には、答えを示すのではなく「思い出させる、考えさせる」ような言葉を選ぶようにする。また、中々参加できていない生徒がいれば、「できそうなこと」を考えさせ役職を与えるようにすると良いと助言をいただきました。教師の声の掛け方、関わり方が生徒たちの充実した学びにつながることを身をもって学ぶことができました。また、この声掛けの工夫は、座学の授業でも意識していきたいと感じました。

２つ目は、生徒との関わり方です。生徒とは授業で関わることが主であり、常に共に過ごすわけではありません。その中で、特に担任を受け持つクラスの生徒とは、休み時間や放課後の時間を大切にする必要があることを学びました。担当したクラスの担任の先生は、HR 後はできる限り教室に残り積極的に生徒とコミュニケーションをとることで信頼関係を築くだけでなく、生徒一人一人のことを知る場にしていました。また、学級活動等では、生徒たちのクラスでの過ごし方を観察することで「過ごしやすいクラスにするにはどうすればいいか」を考えていると教えていただきました。生徒たちを知るためには面談だけでなく、自然な生徒たちの姿が見られる時間を大切にしていきたいと思いました。

今後、家庭科教諭として働く上で大切にしていきたいことは、「家庭科という教科は、生活のことを振り返り、今後の未来を創造していく大切な教科。」「他教科で学んだことや家庭での会話もすべてつながって生きる知識になる。」です。この言葉は、指導していただいた先生にいただいた言葉です。このことを意識し、授業一つ一つが生徒たちの人生において必要になる知識になるように、入念な授業準備や教材研究を行いたいです。また、生徒たちが「もっと知りたい」「すぐに実践したい」と思えるような授業づくりができるよう頑張っていきたいと思います。

この３週間の教育実習では、座学だけでなく、調理実習や体育祭の運営、ＳＨＲの運営など様々なことを経験させていただきました。他の先生方だけではなく、共に頑張った教育実習生の授業から学ぶことも多くあり、課題を見つけ自分と向き合うことができた期間でした。実際の生徒を前にして授業をする経験は、今後の教師像のイメージがつき、より成長していきたいという気持ちが大きくなりました。この経験を糧に、春から教員として精進したいと思います。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程　４回生
麻木　理名

私は1週間、母校の小学校で教育実習を行った。短い期間であったが授業づくりから指導方法、職務の様子、児童との関わり方など多くのことを経験し、学ぶことができた実りある実習になった。

「教師」という立場で学校現場に立ち、物事を見ることで新たな気付きや考えの変化も多くあった。各学年の授業を観察すると学年によって指導方法も異なり、「楽しく学ぶ」から「主体的に学ぶ」に学び方も変化していた。年齢や児童の特徴を踏まえた、話し合いが活発になるような工夫、注意の仕方なども見ることができてとても勉強になった。また ICT の活用が想像以上に進んでいて驚いた。ほどんどの授業でパソコンを使用する時間があり、他の児童と考えを共有したり興味のあることや重要なキーワードについて調べたり、ICT の活用によって広い視野を持った学習が実現できているのだと感じた。実際に研究授業で ICT を使用したことで使い方を理解でき、指導方法の選択肢も広がったため私にとって良い経験になった。

研究授業は2回行ったが、授業を行う度に新たな改善点が出てきた。職員室で授業後の先生方が児童の反応を踏まえて次回からどのようにするか話をしている様子も見て、今後も日々授業の改善を繰り返し、より良い授業を作り上げていくことが大切なのだと強く実感した。特に指導教員の方からの「自分の中で、児童に何を一番に伝えたいのかを強く持っておくことが大切」という言葉が強く印象に残っている。授業が想定外の展開になったとしても児童としっかり向き合い、一番伝えたいことを伝えようとする態度が大切なのだという考え方もできるようになった。大変なこともあったが、頑張って手を挙げ発表してくれたり、授業の後に「自分はこういうことをしたい」と前向きな言葉や「楽しい授業だった」などの言葉をかけてもらったりして授業をする楽しさと自分の伝えたいことが伝わった喜びを感じた。また児童が分からない問題を理解した瞬間や楽しそうに授業に向かう姿勢を見て、教師のやりがいを体感した。

また給食や休み時間等で児童と沢山関わることができた。運動場などで児童と一緒に遊ぶことを通して、勉強以外の色々な会話も出来て心の距離が縮まり、児童の授業中には見られない様な新たな一面も見ることができた。児童と信頼関係を築くためにも、このようにコミュニケーションを取る機会を大切にしながら積極的に関わっていきたいと思った。給食の時間には様々な学年で準備から喫食まで行った。楽しく美味しそうに給食を食べる様子を見て、改めて児童の学校生活の楽しみになるような給食を提供したいと強く思った。学校給食では準備の仕方に加えて、社会性を身に付けるための指導が行われていた。学年が上がるにつれて地産地消や栄養に関連付けた指導も給食を通して行われており、給食が食育の重要な役割を果たしていると実感することができた。

教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科　４回生
山中　ゆうみ

私は、母校の高校で3週間の教育実習を終え、教師として生徒の前に立つ責任や授業をスムーズに行うことの難しさ、生徒との距離の取り方など、大学の授業ではできない学びができた貴重な時間を経験しました。この3週間の中に、授業はもちろん文化祭もあり、非常に濃い3週間を送ることができました。そんな3週間の中で特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、生徒との距離感の縮め方です。実習1日目、担当の先生からの紹介を受け、クラスで挨拶をしましたが、その日は生徒と数える程度しか話せず1日が終わってしまいました。どうすれば生徒との距離を縮めることができるのか考え、私自身のことを知ってもらおうと思いました。次の日から朝のショートホームルームに1分程度時間をもらい、私自身のことについて話す時間を作ってもらいました。すると、「私もそれ知ってる！」「私もそれ好き！」など、共通の話題がどんどん増え、生徒との距離がだんだんと近づいてきました。生徒との距離感が掴めてからは、授業終わりなどにも話をし、その中で出た話題を次の授業の参考にしたりすることができました。この経験から、生徒との距離を縮めるには、自分自身のことをたくさん知ってもらうことが大切だと改めて感じました。そして生徒のことも知っていくことが大切だと感じました。

二つ目は、動き方を一つ変えるだけで、生徒の安全が確保されるということです。体育の授業というのは、安全管理を徹底しないといけない授業であると教わりました。実際授業を行ってみると、「怪我にまでは繋がらないが、危険な場面がいくつかあった」と授業後の反省で担当の先生から仰っていただきました。改善点として挙げられたのは、ボールを蹴る方向を逆にするということでした。安全のために内容を変えるのではなく、ボールが進む方向や生徒が進む方向を工夫することで、安全を確保できるということを、その出来事を通じて学ぶことができました。また、生徒の安全確保は、教師側の声掛け一つでも変わるということも学びました。一言声をかけるだけで、頭の片隅にその言葉が残り、それが行動へと繋がり、怪我に繋がるリスクが減らせるということです。生徒や教師の行動一つで、授業中の安全性が大きく変わるというのは、担当の先生から教えていただくまで気づくことができなかったと思うので、非常に印象に残っています。

3週間という短い期間でしたが、今まで気づくことのできなかった教師としての責任ややりがいを感じられました。教師という職業に対して「大変だ」という印象が大きかったですが、生徒の楽しそうに授業に取り組んでいる姿や、学校生活を送っている姿を見ると、この姿を守っていける教師になりたいなと強く感じました。この経験を忘れることなく、日々生徒と学び成長し続け、出会えてよかったと思える教師になりたいと思います。

栄養教育実習を終えて

健康スポーツ栄養学科　４回生
牧野　里咲

1週間という短い期間でしたが、とても充実した学びの多い日々を過ごすことができました。現場での学びは、大学の講義以上に食育の大切さ、難しさを感じる機会となりました。

私が今後の自分への課題としたいことは、児童が主体となる学びの空間を作ることです。実習校では特に「児童主体」ということに力を入れている研究校で、食育の時間においても先生は「なぜ」「どうして」と児童に問いかける様子が頻繁に見られました。児童が先生の問いに対して個人またはグループで個々の意見を共有し、答えにたどり着く様子を見て私は感嘆しました。私が大学の講義で行った模擬授業において、児童に新しい知識を伝えたい、知ってほしいという思いが強く表れ、一方的に話す時間を控えめにした方が良いと考えながらも長くなってしまいました。現場では、自分が想像しているよりもずっと先生が一方的に話す時間は短く、授業時間のほとんどが先生と児童とのやり取りか､児童の考える時間に時間を割いていました。教員はただ初めから知識という「答え」を伝えるのではなく、児童が自ら答えにたどり着けることができるように導くような言葉がけをして授業を進めていくことが大切であり、それこそが真の学びの定着へとつながっているのだと気付くことができました。また、食育はどのような内容でも、他教科の内容や、普段の生活と密接しているものであり、先生が児童の身近にある話題から質問を投げかけ、目的の内容に結びつけていました。そのため、他教科の内容や、普段の生活の中で結びつく食育の話題について、話の引き出しを増やしていくことも自分自身の課題になると考えました。

私が研究授業の準備をしている際に、担当教員に教えていただいた内容の中で印象に残っているのは､「全く同じ食育の内容でも、クラスや学年によって様々である」という言葉です。児童にはそれぞれ個性があるというのはよく聞くが、クラスや学年にもカラーがあり、同じ質問に全く新しい返答がくる、授業参加の積極性に差があるなど様々であることを他教科の授業見学を通して感じました。そのため、臨機応変に対応をしながら授業を進めていく必要があり、全く同じ授業計画で進めるわけにはいかないことが分かりました。しかし、それらの違いは授業計画の改善など児童と共に教員側も共に成長できるということを研究授業の中でも身に染みて感じ、先生の大変さと共にやりがいも感じました。

教職を履修するにあたって、実習へ行く前までは栄養教諭になるには自分には知識も責任も足りていないのではないかと常に不安に感じていました。しかし、実習を通して課題が見えたり、児童と関わることで教師として成長できることを感じることができました。この貴重な経験を今後の自身への成長の糧として、栄養教諭という道も視野に入れながら栄養士として学び続けていきたいです。

養護実習を終えて

看護学科　４回生
田島　なごみ

3週間の実習は、とても短くあっという間で貴重な時間を過ごすことができた。日々充実し、学びを得られ、臨地に出ていくことでしか体験できないことばかりだった。

3週間で子ども達と触れ合い、授業を行い、掲示物を作成し、1日保健室体験をするなど様々なことを行った。こうした実習を進めていく中で、様々な立場から子を支える先生方は、子ども第一に動いていることを学んだ。学校という場は、子ども達にとってすべての時間が学びの場となり、子どもたちと関わるときの言葉がけ1つをとっても重要になると学んだ。この子にとってどんな言葉がよい影響を与えるのか、考えていかなければならないと実感した。

子ども達は、私に積極的に話しかけ、田島先生と声をかけてくれた。それがとてもうれしく感じた。先生方は、毎日挨拶をしてくださり、あたたかな拍手を下さるなど私を気に掛け、私を1人の先生としてかかわってくださった。先生方のこうした姿勢が、子ども達にも伝わっているのだと思えた。

初めての授業では、自分の力不足の部分に目が行きがちだったが、先生方からは良かった点が沢山伝えられた。落ち着いた声のトーンや目線の移し方、つぶやきの拾い方や臨機応変な対応など自分では気づけなかった所まで目を向けてくださり、自分の強みを知った。また、授業をして初めて知った子ども達の素晴らしさがあった。毎日授業を観察し、先生が大切にされていること、子ども達の反応を知る努力をしていたが、教室の後ろからでは分からなかったことばかりだった。授業をして初めて実感した。そして、まだまだ課題も多かったが、授業をすることがこんなにも楽しいことと知ることができたのはとても大きな成果だった。

実習中、先生方から他の教職の免許を取らないかという話があった。養護教諭のみではもったいないという理由からであった。またなぜ看護師と養護教諭の異なる職種を取りたいのか、なぜ教育学部ではないのかという事を聞かれることがあった。私は人前で話すことが苦手で教師という職種には向いていないと思い将来像の中に学校の先生という選択肢はなかった。それでも養護教諭という職業を選び、この実習でより一層、養護教諭になりたい気持ちが高まっていた。改めてなぜ私は看護の道から養護教諭を目指しているのかをじっくりと考える機会となった。看護の道から養護教諭という職業を選んだ理由を見つめ直し、今回の実習の学びと共に、自分自身が目指す養護教諭像を固めることができ、この実習はとても価値のあるものとなった。

初めてので、いろいろな思いとともに挑んだ実習でとても多くの学びを得られ、充実した3週間を過ごすことができた。こうした機会を作っていただいた、先生方、そして子ども達へ感謝を忘れず、子ども達の命、健康を守れる養護教諭になれるよう努めていきたいと思う。

幼稚園教育実習を終えて

幼児教育学科　２回生
高田　菜那

私がお世話になった園は4・5歳児合わせて6人という少人数の園でした。そのため教師と幼児が一緒に楽しみ学ぶような保育が日々繰り広げられていました。少人数でと異年齢保育の2つが合わさった難しさや工夫する点などありましたが、毎日が新しい学びの連続となりました。

私は部分実習を5回させて頂きました。最初はとても緊張しており、保育をするのに必死になってしまい自分らしい保育ができませんでした。そのとき担任の先生から「新しい遊びに子ども達も夢中になっているから丁寧に接してあげてね」と助言を頂きました。助言を頂いてからは遊びの最後に集まって「何が楽しかったか言える人は教えてください」と伝え、一人一人と向き合う時間をもったことで時間を作ることにより、幼児との距離が縮まるのを感じました。幼児も「なにがどのように思ったのか」を相手に理解して貰えるように自分の言葉で話してくれるようになりました。

実習に入ってから、運動会が近かったということもあり、リレーやタイヤ引き、玉入れなど様々な遊びへの展開の方法を学ぶことができました。その中でも特に「子どもの興味」への教師の素早い対応に驚きました。玉入れをしていた時ある幼児が「勝った時のメダルはー？」と教師に聞いていました。次の日、朝の間にオリジナルのメダルが作れるように用意し、「メダル作って今日勝った人につけるのはどう？」と新たな遊び方を提案し、継続して行える工夫をされていました。また教師の配慮として幼児が飽きないように毎日ルールやチームを変えたり、作戦会議をしたりと幼児の興味・関心が続く工夫されていると気づくことが出来ました。

運動会本番では、竹馬に1人で乗れなかった幼児が巧技台からスイスイ一人で乗れ自慢げな表情を見せたり、今までは教師としていたしっぽとりを保護者の方とするという特別感にやる気を見せたりする姿が見られました。少人数の園ですが様々な経験が幼児期にできるように教師や保護者や地域の方々が本気で幼児とぶつかり、一緒に楽しむ様子がとても印象に残る運動会となりました。

教育実習を通して、保育の楽しさや子ども主体の保育の大切さを再認識し、来年から社会に出る私にとって、座学だけでは学べないたくさんのことを吸収できた3週間だったと感じています。大きな行事がある中、実習を受け入れてくださった幼稚園の先生方や保護者の方々、そして明るい笑顔で「せんせーい！」と言ってくれ、たくさん遊んでくれた子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいです。この経験を活かして、自分のやりたい保育ができるようにこれからも努力をしていきたいと思います

学校ボランティア活動を終えて

教育学科　２回生
村上　碧

私は、６日間の学校インターンシップで３年生と５年生、なかよし学級をそれぞれ２回ずつ入らせていただきました。

教師として学校現場に行くことは初めてで不安な気持ちとしっかり子どもと関わることができるか心配でとても緊張をしていました。今までは児童の視点でしか教師や学校を見ていませんでしたが、インターンシップに行き、教師としての視点で学校、児童を見ることでたくさんの気づきがありました。

学校に行き、最初に校門で朝の挨拶をすることから一日が始まりました。朝の挨拶は様々な学年の児童と関わる機会でした。挨拶をしているときも児童一人一人の様子を観察している先生の姿を見て児童のことを見ることができるのは授業や休み時間だけでなく、朝の挨拶などの些細な時間でも見て関わることができるのだと知ることができました。私が行かせていただいた小学校ではどの学年の教師も『褒める』ということを忘れない姿勢がありました。褒めるということは簡単なことのように見えますがとても難しいことなのだと実感しました。褒めることは認めることだと教えていただきました。誰でも褒められると嬉しく、もっと見てほしい、頑張りたいという気持ちを膨らませることができるのだと思いました。また否定的な言葉を使うのではなく、どんな時もプラスの言葉で伝える、できている児童を周りに分かるように伝えることで児童のやる気を引き出すことができるのだと学ぶことができました。昼休みには「一緒に遊ぼう！」と声をかけてくれる児童がたくさんいて新鮮な気持ちになりました。児童たちは積極的に教師と関わろうとしていたり、素直に向き合ってくれるからこそ、自分自身も真摯に受け止め身体全体で表現していくことが大切なのだと感じることができました。そして一人一人のことを理解し認め合うことが大切だと知ることができました。

６日間という短い間でしたがその期間で私は、教師は子どもの成長を間近で見ることができる、児童と感動を一緒に感じることができる、教師も常に児童と一緒に成長することができると教えていただきました。児童と一緒に問題を解いている時に問題が解けたら児童は嬉しいのは当たり前だと思うが一緒に考えていた私も嬉しい気持ちになったことを覚えています。短い期間でしたがそのような経験ができ、その気持ちこそが教師として大切な気持ちなのだと実感することができました。

私は現在、インターンシップで行った小学校とは違う小学校にスクールサポーターとして行かせていただいています。スクールサポーターでもたくさんのことが学ぶことができていますがインターンシップで培ったものがあったからこそ新しい発見を日々することができています。児童と一緒に成長できるような教師になれるように頑張っていきたいと思います。

学校ボランティア活動を終えて

教育学科　３回生
赤松　珠生

私は、2回生から始まった学校インターンシップに続き、同じ小学校で3回生でもスクールサポーターとして活動しています。学校インターンシップでは、週に1回、1年生から6年生までのサポートを毎回異なるクラスで行っています。私がスクールサポーターをしていて良かった点は2つあります。

まず1つ目は、大学では体験できないことを実際に経験できる点です。小学校の現場に行くと、児童と関わる機会が多くあります。例えば、全学年の学習サポートをしたり、休み時間に一緒に遊んだりします。他にも、教室の雰囲気や児童との日常的なやり取りを実際に体験することができ、学校現場のリアルな状況を理解することができます。これらは、普段の大学生活では得ることができません。私は2回生から活動を続けており、これらの経験が今年の教育実習に非常に役立ちました。児童との距離感や授業の進め方、支援の方法を自分の目で現場にいる先生方から直接学び、それを実践に生かすことができたのはとても心強かったです。

2つ目は、児童の成長を目の当たりにできるという点です。毎時間、様々なクラスに行くため、先週児童がつまずいていた問題を、次週クラスに行った時に解けるようになっている場面を見ると、とても感動します。他にも、体育の跳び箱の授業に入ったとき、最初は怖くて何もできなかった児童が、先生や友達からの声掛けを受けて授業の最後には跳べるようになっていた授業を見たことがあります。こうした瞬間を目の当たりにすると、教員という仕事のやりがいを強く感じます。教員の言葉や行動が、児童の成長に影響を与えているということを実感できるのはとても幸せなことであり、改めて教員になりたいという気持ちが強くなった場面です。

このように、週に1回の活動ではありますが、毎週の活動を通じて多くのことを体験し、学ぶことができるため、学校インターンシップは将来教員になりたい私にとって教員としての道を歩むための重要なステップであり、実践的な学びを得ることができる良い機会だと感じています。これからも活動は続くので、楽しみながら将来の自分のために役立つ経験をたくさん積んでいきたいと思います。

幼稚園ボランティア活動を終えて

教育学科　４回生
中野　詩音

私は、2回生の後期から約2年半、4歳児クラスと5歳児クラスがそれぞれ1クラスずつある神戸市の幼稚園でボランティア活動をさせていただいています。

長期間子どもたちと関わらせていただくことで、竹馬ができるようになったり、名札が1人で付けられるようになったりなど、子ども一人ひとりの様々な成長の姿を実際に見守ることができ、保育者目線でのやりがいや感動を実感することができました。

同い年の子ども同士の関わりだけではなく、4歳児と5歳児で交流をすることも多々あり、異年齢の子どもの関わりを観察することもできました。年長からは、年少を引っ張っていくかっこいい姿が見られ、年少からは、その年長の姿を見て自分もやってみようと行動する姿が見られ、頼ったり頼られたりする関係の中でお互い成長することができているのだと感じました。

また、配慮が必要な子どもとも関わることがあり、保育者のみが補助をするのではなく、周りの子どもたちも手伝ったり助けたりする姿が多く見られ、心の温かさを感じ、子どもたちの思いやりの心を育むことの大切さにも気づきました。自分のことだけではなく、周りのためにも行動できる人になることで、これから様々な人と出会う中で、よりよいコミュニケーション作りをしていくことに繋がっていくと考えました。

そして、運動会や音楽会、生活発表会も本番や練習に参加させていただきました。子どもたちを見ていると、普段の遊びとは違った楽しさや感動を味わっており、「やってみたい」という主体性も高められていることに気づき、行事を行うことの大切さを実感しました。また、子どもたちが普段から楽しんでいる遊びを運動会の競技にしたり、子どもたちにいろんな楽器に触れてもらって得意な楽器を見つけて音楽会で披露したりなど、クラスや子ども一人ひとりの好きなことや得意なことを保育者が見つけて、それを伸ばすことができる機会でもあることに気づきました。そして、行事後には、やりきった達成感やクラスの絆の深まりも感じられ、行事は子どもたちの心身の成長に大きく関わっていることが分かりました。

様々な子どもたちや、保育者・保護者など様々な大人の方々と関わったり、行事など様々な経験を積んだりすることができ、これから保育現場で働いていく上での準備や心構えをしていくことができたと思います。そして、子どもと関わる保育者の方々を見ていると、子どもに負けないくらい遊びを楽しむ様子が見られ、保育者が楽しそうにしていると、その周りにいる子どもたちもとても幸せそうに笑っており、子どもだけが楽しむことができれば良いというわけではないのだと分かりました。子どもと大人の関係に縛られるのではなく、子どもと一緒に楽しみ、成長し、一人ひとりの子どもの理解者としての保育者になることができるように、子どもの目線に立って保育を考えられるようにしていきたいです。

学校ボランティア活動を終えて

家政学科　４回生
河野　笑佳

私は大学生２年生から３年間、神戸市の中学校でスクールサポーターとして活動しました。より多くの神戸市の中学校を知りたいと思い、３つの中学校で活動を経験しました。その中で私が学んだことは主に２つあります。

１つ目は、生徒との距離の縮め方です。３つの中学校を経験したことで、学校やクラスにより生徒たちの様子が全く違うことを実感しました。自分から話しかけてくれる子、おとなしい子、話しかけてもなかなか打ち解けるのが難しい子など、どの生徒にも同じ対応では信頼関係が結べない事を知りました。対応に悩んだ時、周りの先生方に相談をすると、授業中の声掛けが大切だと教えていただきました。活動を始めた頃は、生徒とのコミュニケーションは休憩時間が重要だと思っていましたが、授業中に学習の手助けをしたり、進捗を褒めたりすることでも距離が縮まることを実感しました。また、実践してみることを続けていくうちに、生徒が何に困っているのか、今がどんな状況なのかをしっかりと把握して行動することができるようになり、生徒一人一人の違いを見ながら距離を縮めていくことの大切さを学びました。私は、これからも生徒の様子をよく観察し、ひとりひとりに合わせた関わり方で生徒との人間関係を築いていきたいです。

２つ目は、生徒の立場に立って考えることの大切さです。学習支援を行う中で、中学1年生の数学授業では「ぐんぐんクラス」と「じっくりクラス」に分かれて指導を行いました。1学期には「じっくりクラス」の生徒支援を担当しました。数学が苦手でやる気が出ない生徒が多く、対応に難しさを感じました。そのため、生徒との対話を通じて、理解できない原因や適切な伝え方を考え、図やグラフを用いるなどして工夫しました。その結果、数学の苦手を克服する生徒が増え、2学期には「じっくりクラス」の生徒たちが基礎の理解を深め、「ぐんぐんクラス」へ昇進することが決まりました。「ぐんぐんクラス」でも問題に積極的に取り組む姿を見て、大きなやりがいを感じましたし、生徒の立場に立って考えて伝えることの重要性を学びました。

スクールサポーターの経験から、教育実習の際にも生徒との対話や授業の進め方など落ち着いて取り組めたと思います。３年間の活動を続ける中で、大学の授業や課題との両立が大変な時期もありましたが、学んだことや各学校での思い出を振り返ると活動を続けて良かったと心から思っています。4月からの学校現場でもスクールサポーターの活動で学んだことを活かし、さらに成長し続けていきたいです。